



## スケールのちよと大きい話

大 西 巖\*

## 小説十八史略

十八史略は曾氏（曾先之，詳細は不明）の著作であり，古い中国の18の歴史書を略記したものである。その歴史書とは

史記，漢書，後漢書，三国志，晋書，宋書，南齊書，梁書，陳書，魏書，北齊書，周書，隋書，南史，北史，五代史，宋史

で，これらをまとめたダイジェスト版が十八史略である。

ここには太古，三星，五帝，夏，殷，周，春秋戦国，秦，西漢，東漢，三国，西晋，東晋，南北朝，隋，唐，五代，宋，南宋に亘る数千年間に繰返された栄枯盛衰が記されており，わが国でも昔から歴史文学書として周知されている。その文章が秀麗であるため，歴史そのものの興味はもちろん，中国文学の精華として大いに鑑賞されてきた。

筆者が中学生の頃，漢文の先生から赤壁の賦の名調子何ページかの暗誦を命じられ，道を歩きながら口ずさんだものであるが，今はほとんど忘れてしまった。有名な言葉も沢山覚えていたが，今記憶に残っているものは「臥薪嘗胆」と「四面楚歌」ぐらいではなからうか。

昨年末発刊された小説十八史略（陳舜臣著，毎日新聞社）全4巻を繙き，少年の頃を懐しむと共に新らたに別の興味をおぼえた。これは小説であるから原書の名文は僅かしか引用されていないが，日頃我々の使用している用語や銘句の生れた語源，古事来歴の説明が，歴史の展開と共に平易に語られている。

物語りに熱中し，マーキングを忘れた個所もあるが，筆者が気まぐれにマークしたものだけを取りあげると，前記の臥薪嘗胆，四面楚歌の

ほかに

皇帝，万乗の君，便殿，宋襄の仁，三舎を避く，鳴かず飛ばず，鶏口牛後，腐心，軌を一にする，道祖（神），燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや，王侯将相なんぞ種あらんや，燎原，社稷，虞美人草，卷土重来，左袒，元号，延寿，入朝，石に立つ矢，烏合の衆，井の中の蛙，隴を得て蜀を望む，鬻鑠，虎穴に入らば虎子を得ず，後門の狼，（紙の発明），白浪（五人男），髀肉の歎，三顧の礼，白眉，泣いて馬謖を斬るなどがある。

また全巻に脈々と流れるものは，昔の中国の人々の精神構造を支えていた柱のうち，見逃し得ない2本すなわち1本は専制と下剋上，あと1本はあきれる程の気の長さ，根気のよさである。今小説十八史略中からそれらの2～3をとりあげ，短かくカットして紹介しよう。多少のユーモアも感じられるので，題して「スケールのちよと大きい話」とした。

## 羿を殺すものは是れ逢蒙

下剋上のトップバッターとして登場するのがこの話である。しかもこの話は中国に残っている数少ない神話の中にでてくるものであり，あとに続く歴史の内容を暗示しているかのようである。下剋上が歴史の事実である限り上はうかうかできない。強くなった下を倒して行く必要がある。そこで歴史はスッタモンダとややこしく展開して行く訳である。

国盗り物語りだけではなく，個人の技芸，技術においても師の最大のライバルは成長を遂げた弟子であり，弟子にとって自己の名をあげるための最短コースは師を打倒することである。わが国では「恩返し」「出藍の誉れ」などのソフトムードを好む傾向があり，せいぜい「飼い犬に手を噛まれる」ぐらいが好まれるが，十八

\* 大西 巖 (Iwao ONISHI), 大阪大学, 名誉教授, 工学博士

史略の世界はそんな生やさしい言葉ではどうにもならない。

羿は堯の時代（夏の時代とも言われる）の英雄（神）であり、弓の名手でもあった。天帝は10人の息子（太陽）が一度に照り輝いて地上の人々を困らせたので、羿に命じて彼らを懲らしめようとした。融通のきかない羿はほんとうに9本の矢で9名を射殺してしまった。残り1本の矢は盗まれていたので息子1名だけは辛うじて生き残った訳である。怒った天帝は羿とその妻「嫦娥」を下界に降ろしてしまう。

彼らは人間になったのであるから、天上へも戻れず、またいつかは死なねばならない運命にある。人間生活の間には夫婦それぞれの浮気があってお互いの仲はしっくり行かない。嫦娥は仙人から2粒の薬を授けられる。2人が1粒ずつ飲めば地上にあって無死となる。1人が2粒を飲めば1名だけは天に帰れるが、残された者は昇天もできずに人間としての寿命をまたねばならない。

嫦娥は妙薬2粒を1人で飲んでお人よしの夫を置き去りにするが、罰を受けて昇天の途中で月に止まる。これが「男女それぞれの浮気」「女房でも信用できない」などの話のオリジナルかも知れない。

さて逢蒙は羿の家来であり、弟子であった。彼は次第に弓術の腕をあげ、羿さえいなければ天下無敵という所までになっている。そこで羿を射殺しようとするが失敗し、結局桃の木で撲殺してしまう。師は弟子の著しい上達を好まず、王は有力者の台頭を排除する訳である。下は上を、上は下をで数千年に亘るドロドロとした歴史が続いて行く。

### 酒池肉林

NHK大河ドラマのノロきぐらいではとても追いつけない史劇の一つを紹介しよう。ウロチョロ、コセコセとし、効果が目前に得られないと納得しない現代日本人には、精神安定剤ぐらいの薬効はあろう。

殷王朝の末期（紀元前1030年頃）の話である。史記によれば殷の紂王は愚者ではないが、エジプトのファラオに似て絶対者であり、現人

神になったような傾向を持っていたという。周の文王は侯として殷に仕えていたが、彼はその子、旦らと共謀して紂を滅さんとする。その手段は殷王に美女を供し、彼女のリードで政治をあやまらせる。

この計画にうってつけたように絶世の美女が現れる。それは諸侯の中の有蘇という人の娘である。これを手なづけて紂王に供するのなら別に変った話ではないが、旦はこの娘が結婚して女兒を産めば、それを養子に貰う約束をする。幸い旦の願いは実現し、可愛い女兒は幼い頃から特殊の教育を受けることになる。すなわち紂王の性格をよく研究しておき、これを籠絡するのに必要な諸要素を持たせるための「特訓」である。この辺りが如何にも時間を超越した感があって面白い。

旦は成長したこの絶世の美女に自分の名である旦に女へんを付け加えて姐と名付けた。さらにこれに姓の己が加わって彼女は「姐己」と呼ばれるようになる。彼らの計画は実現し、姐己はその手腕を充分に発揮し、紂王の政治は乱れ、有名な「酒池肉林」を生むのである。

紂王の野外大バーベキューパーティーは池の水を干し、底や周囲を石でかためて美酒を注入し、焼けた肉は木立の枝に吊るし、飲み放題、食べ放題の宴会であった。おまけのページェントとして幕の外に千余の裸女（宮女）と男性を配した。やがて幕が落ちると、あられもない乱交パーティーが衆目に曝されるという趣向である。

### 大陰の長信侯

大陰とは男性シンボルが極端に大きいという意味らしい。日本でのチャンピオンを探せば、さしずめ弓削の道鏡という所であろう。誰かの書いた「道鏡」という小冊子を読んだことがある。これによれば道鏡と女帝との恋は純粹であったが、第三者の目に余る程の行為が人々の口のにぼっただけとある。またそれには彼の巨根を示す数値はもちろん、威大さを示す具体的な逸話も示されていない。

秦の始皇帝は紀元前246年に彼が秦の「皇帝」になってからの呼称であり、若い頃の名を政と

称した。政は秦王子楚と妾の趙姫との間に生れたとなっているが、実は趙姫の前夫呂不韋という男が彼女に孕ませていた子供である。呂は己れの出世のため子楚の求めに応じ、妊娠をかくしてこの女を提供している。

子楚が死んで政が王となった。母太后となった彼女は女盛りのままの未亡人であり、セックスの相手を求める。母太后の愛は専ら肉体的な愛欲であり、精神面での要素は少なかった。始めの相手は前夫の呂不韋であった。権力を持つと殺されるおそれがあると考えた彼は代役を探す。

ここで巨根のロウアイが現れる。呂は彼を裸にし、勃起したその巨根に桐で作った車輪を嵌め、これを持ち上げたまま歩かせる。これは巨大と同時に持久力の長いことをも誇示したものであり、大評判となった。呂不韋は「世の中にはこんなデカイのもあるんだなあ舌を巻くと共にいささか複雑な気持ちにならざるを得なかった（本文）」という。

早速母太后からの懇望がある。そこでこのスーパーマンをうわべは宦官に仕立てて彼女に供したのである。巨根は彼女のお気に入り、スーパーマンは長信侯の称号を得、山陽の地を与えられ、小型ながら諸侯の列に加えられた。その後彼は私兵団を抱え、次第にその勢力を増したが、蔭の仕掛人呂不韋の暗躍にのせられて謀反の兵を挙げる。そこで秦王政に一族悉くと共に討伐される訳である。

### 盛り塩の由来

晋の武帝、司馬炎の後宮は1万を超える美女

であり、秦の始皇帝の3000人ぐらいはもはや驚くに足りない。文中には美女となっているが、1万人以上ともなれば美女ばかりではなく、中にはそれなりの者も多少は混っていたのではないかと思われる。何れにしても帝の方では女の数が多すぎて、今日は誰を相手にしようかと悩まねばならない筈である。しかし彼はこの問題を如何にも不精者らしく解決している。

小説十八史略本文に従えば、武帝は後宮のなかを、羊のひく車に乗って行く。女たちはそれぞれ個室を持っている。羊がとまった所で車を降りて、その部屋に入ることにしたのである。帝の寵愛を得ようとする頭のよい女性がついて、自分の部屋の戸に竹の葉をさしたり、部屋の前の地面に塩をまいた。竹の葉や塩は羊の好物であるので車は必ずそこでとまることになる。水商売の店の前に塩を盛る習慣はこれに端を発しているという。

「ちょっと大きい」駄文の終りにこの話を加えたのは美女1万という数の大きさからではなく、羊にまかせる大きさが気に入ったからである。「ちょっと大きい」の日本現代版として何があるかと考えて、ラスベガスでの賭博で5億円をすったという道楽息子の話を思い出した。しかしあそこは普通の世間と違い、1泊500万円のルームもあり、気に入ったホテルボーイにロールスロイスの新車を進呈した客もある程で、あの雰囲気浸たれば気がおかしくなるらしい。また単細胞であるほど単純に同化され易いという。しかも5億円が他人のふところ目当てなら「根性のちょとみみっちい話」を書く時のネタに残しておこう。（昭和55年8月）